

旧制福岡高等学校関係資料について

折田, 悦郎
九州大学大学文書館 : 教授

<https://hdl.handle.net/2324/11874>

出版情報 : 貴重文物講習会. 11, 2008-08-22. 九州大学附属図書館
バージョン :
権利関係 :

旧制福岡高等学校展

写真・展示品目録

2008年8月20日～8月22日

於九州大学附属図書館(中央図書館2階自由閲覧室)

九州大学大学文書館

I 写真目録

■福岡高等学校正門、本館

本館は九大分校・教養部の本館としても使われた(～昭42年7月)。

■創立一周年記念式典

大正11年11月18日。壇上は秋吉音治校長。式典には真野文二九州帝大総長も招かれ祝辞を述べた。

■全景(機上撮影)

左上に昭和4年完成の大濠公園が見える(絵葉書)。

■全景

創立期の全景。東方からの撮影。

■福岡高等学校略図

昭和16年2月現在。敷地は基本的には現在の九大六本松地区と変化がない。

■講堂・玉泉館・亭々舎

昭和6年。亭々舎は現存。九大の学生集会所としてコンパ等に利用されている。

■歴代校長

初代 秋吉音治 大正10.11～昭和12.7

二代 堀 重里 昭和12.8～昭和16.4

三代 折竹 錫 昭和16.4～昭和20.11

四代 山尾政治 昭和20.11～昭和24.6

五代 永井重義 昭和24.6～昭和25.3

最後の校長の永井重義は九大教授も兼ね、第一分校主事も務めた。

■歴史学の名物教授玉泉大梁

昭和10年頃。玉泉教授は古文書や考古学資料等の収集・保存に努めた。昭和5年3月開設の玉泉館(歴史資料室)は、彼の名に因む。

■授業風景

大正13年頃。化学実験室。

■授業風景

昭和16年頃。ドイツ語授業風景。教壇に立つのは文学活動でも著名な秋山六郎兵衛教授。

■図書館にて

昭和10年頃。

■休み時間

昭和12年頃。本館2階南側。

■運動会

昭和16年頃。

■応援風景

昭和16年頃。

■寮食堂風景

昭和6年。旧制高校における「寮」は、最も基本的な教育、生活の場所であった。

■勉強

昭和15年頃。寮での試験勉強風景。

■寮内のストーム

昭和16年頃。ストーム(乱舞)も旧制高校文化の特徴の一つである。

■野外ストーム

昭和15年頃。「あゝ玄海」は福高を代表する応援歌。

■運動部

昭和8年頃。運動部活動は活発であった。原則として全員が何らかの部に所属した。

■排球(バレーボール)部

昭和17年。全国インターハイ2度目の優勝時のもの。福高排球部は強豪として知

られたが、戦局の悪化により翌年、廃部となった(昭和21年復活)。

■東中洲を歩く福高生

昭和4年頃。昭和初年、福岡市は九州一の都会となった。

■大濠公園にて

昭和17年。近くの大濠公園は福高生にとり恰好の憩いの場だった。

■屋台

昭和10年頃。

■カフェ ブラジレイロ

昭和15年頃。東中洲河畔のブラジレイロは、福高・九大生ら、文学青年の溜まり場だった。

■夜間演習

昭和2年10月頃。当時の高等学校では教練と称する軍事教育が義務づけられていた。ただ、いやな教練でも年1回の夜間演習(2泊)は楽しみの一つでもあったという。

■集団勤労作業

昭和13年8月27日～30日。同年、全国の学校で集団勤労作業が始まった。

左上：朝礼。下：道路清掃。右上：校内清掃。下：陸軍墓地の整理作業。

■桜の季節

昭和16年春。第一回生の寄付により桜が植えられた。桜並木を思い出す福高生は多い。

■講堂内部

入学式、卒業式等、多くの行事がここで行われた。

■博多駅頭での乱舞

昭和23年11月2日。佐賀高等学校歓迎ストーム。この後、福佐両校生は「国体」のため賑わう博多の街を抜けて福高に到着した。戦後の雰囲気がよく出ている。

■福高記念祭

昭和23年11月2日～7日。創立27周年記念祭。記念祭の一環として対佐校戦も行われた。

■九大教養部全景

昭和38年。福高創立期に比べ、地域の変貌は目覚ましいものがある。

■九大教養部

昭和30年代末。福高以来の校舎のカラー写真は珍しい。

■九大教養部

昭和42年夏。福高の本館と九大教養部の新本館が前後して建っている。

■「青陵の泉」の像除幕式

昭和43年6月2日。「像」は青陵会から九大に寄贈された。上の写真は西公園での乱舞。制作者の安永良徳氏に制作直前、青陵会会員が「乱舞」の様子を見せているところ。

■元南方特別留学生九大訪問

平成7年8月4日。昭和20年4月、福高は南方特別留学生を受け入れた。写真は元留学生による和田光史(福高24回理2)九大総長への表敬訪問。訪問には青陵会の尽力があった。

■続く九州寮歌祭

平成17年11月14日(西鉄ソラリアプラザ)。九州寮歌祭には九州だけでなく全国の旧制高校出身者が集まる。既に本年度の開催も決定している。

II 展示品目録

■年報（大正10年度）

当時の官立学校は、毎年「年報」形式で文部大臣宛に報告を行った。創設途上にある福高も「概況」以下、初年度の報告をしたが、「規程」や「設備」については、いまだ準備中との記載がなされている。（『年報綴 福岡高等学校』）

■本館工事写真（大正10年頃）

工事中の写真は珍しい。写真の裏には建設工事を請け負った「福岡市外鳥飼村 福岡高等学校建築場 日本土木株式会社出張員詰所」の捺印がある。

■芳名帳

創設当初より文部官僚、政治家等の著名人が来校した。例えば、山崎達之輔（福岡県出身。文部省実業学務局長）、南弘（元知事。文部次官）、生駒萬治（佐賀高等学校長）、武部六蔵（県学務課長）、服部宇之吉（東京帝大教授）、中野正剛（県選出衆議院議員）、白坂栄彦（県立中学修猷館長）等の名が見える。（『芳名帳 第巻号 福岡高等学校』）

■福岡高等学校一覧

戦前期の高等教育機関は、『〇〇一覧』という冊子を刊行した。内容は「沿革略、法令、学則、生徒心得、敷地建物」等からなり、学校史研究の基本的な資料となっている。

■福岡高等学校公印

最も大きな「福岡高等学校」印、上段右端の「福岡高等学校長之印」、上段中央の「福岡高等学校」印（割印）は、昭和25年3月31日の最後の卒業証まで利用されている。

■初代校長秋吉音治履歴

福岡県出身。豊津尋常中学から第五高等学校を経て、東京帝大(文科)卒業。福岡県立中学明善校教諭、朝倉中学校長、鹿児島県立第一鹿児島中学校(現鶴丸高校)長を経て、創設と同時に初代校長に任ぜられた。それまでは殆ど考えられなかった中学校長からの抜擢である。今から71年前の昭和12年7月1日、在任中に亡くなった。（『旧職員履歴書綴 福岡高等学校』）

■「故秋吉先生」

秋吉は独特の思想、教育観をもって、15年の間、福高校長を務め、同校の校風形成に大きな影響を与えた。この冊子は教授、卒業生らの追悼文を中心に、履歴等を収めたものである。（『故秋吉校長追悼録』昭和13年7月 福岡高等学校同窓会）

■外国人教師契約書綴

福高には創立期より外国人教師が雇用されていた。彼らのうちの半数は、九州大学西新プラザの地にあった福高教職員宿舎に居住している。一時期、外国人教師宅に下宿していた生徒もいたという。（『外国人教師契約書綴 福岡高等学校』）

■外国人教師宿舎

同地の教職員宿舎は全6棟であったが、このうち5棟は平成12年、取り壊しとなった。しかし一棟（昭和2年建設）が現存し、福岡市の有形文化財に指定されている。（『福岡市指定有形文化財 九州大学西新外国人教師宿舎第3号棟修理工事報告書』九州大学建築史研究室）

■受験者心得（昭和16年3月）

現在と同様に受験に対する注意事項が書かれている。同年の入試は文甲（第一外国語が英語）、文乙（独語）、文丙（仏語）計120名、理甲（英語）、理乙（独語）計80名募集のもと、3月16・17日に行われた。科目は文科が国史、国語漢文、数学、日本地理及東亜地理、理科が国史、数学及物理、外国語、生理及衛生並鉱物であった。（『昭和十六年 入学者選抜考査関係書類 教務課』）

■入学志願者・許可者数調（昭和17年度）

大正後期までの福岡県中学出身者は、五高（熊本）、七高（鹿児島）等、他県の高校に進学しなければならなかった。しかし、福高創設により必ずしもその必要は無

くなった。旧制福高は、修猷館、明善校、小倉、福岡等、県内中学出身者が多いことで知られるが、下の資料はそれをよく現している（上段文科、中段理科、下段文理の総計）。（『昭和十七年 入学者選抜考査関係書類 教務課』）

■入学者選抜試験問題

「国語漢文」（昭和十七年） 時勢が現れている。

「数学及物理」（昭和十六年）

（『大正十一年度以降 本校入学者選抜試験問題集教務課』）

■教科用書目（昭和12年度）

外国語とならんで、教員関係の書目が目に付く。（『大正十一年度以降 本校教科用書目綴 福岡高等学校』）

■教科書

上右：『莊子内編』 昭和4年

上中：“Choix D'essais Contemporains Tome II”（仏語）昭和13年

上左：『解析幾何』 昭和14年

下右：Goethe “Ferdinand und Ottilie”（独語）昭和24年

下左：Philip Gilbert Hamerton “The Intellectual Life”（英語）昭和21年

■入学許可通知書（昭和17年3月）

文書奥の付箋により、昭和17年度より従来の甲乙丙が一組、二組という呼び方に変わったことが判る。

■時間割（昭和17年度）

左下の文科一年三組は、従来通り仏語を第一外国語としている。しかし翌年度から、文科は英語と独語だけの「組」となった。（『自昭和三年度 学科担任及配点表』）

■学力検定試験問題（昭和13年2月）

論理学（右頁）と法制経済（左頁）の学年末試験問題。（『高等学校高等科学力検定試験問題綴 福岡高等学校』）

■成績通知票（昭和16年、17年）

科目は未記入が合格である。（伊東一義氏（第19回文甲 東大法）寄贈）

■成績表（大正11年度）

成績評価は厳しく、その管理も厳重に行われた。大判の成績表にはそれがよく現れている。

■写真帳（昭和8年3月卒業生）

『写真帳 第九回卒業』とあるが、入学時の写真を事務的に保管していたもの。原級に留まった生徒分については剥がされ、別途保存することになっていた。

■戦前期の校友会活動

職員生徒で組織する親睦団体＝校友会の活動も活発であった。同会には文芸部をはじめ各運動部が所属したが、昭和15年11月、「報国団」と改称した。展示したのはそれらの機関誌。

■戦後の文化活動

戦争中、一時沈滞した文化活動は戦後一挙に開花した。上は「けむり句会」の同人誌（同誌は廃校後も続いた）。左上は第25回文一組の「回覧雑誌」。左は芸術部（音楽部）のプログラム（カラーコピー。園田久九大名誉教授提供）。園田教授（福高）は戦後の音楽部を指導した。

■思想問題

大正末～昭和初期のいわゆる「思想問題」に対して、秋吉校長は極めて厳しい態度で臨んだ。上の著書は、福高社会科学研究会に関係し処分された著者が、戦後（昭和60年）著したもの。左側のビラは、昭和6年、校内に貼られていたもの。

■夏休み前の保証人宛文書（昭和7年7月）複製

上の文書が出された昭和7年頃には、「左傾」だけではなく、「右翼的テロ」も問題となっていた。秋吉は父兄（保証人）に対して、子弟の外出、旅行、交友、愛読書等に「御注意」あるべく、要請を行っている。

■秋吉校長の教育方針（昭和10年5月）

秋吉は「思想善導」には家庭との連絡が重要と考えていた。この資料（右頁）には入学宣誓式への父兄出席率が平均85%（去年は88%）等との記述が見える。松田源治文部大臣の来校に際して、福高の教育概況を説明したもの。（『来校者ニ提出セシ書類控綴』）

■帝大・官公立大への入学率第1位(昭和4年)

この頃になると入学難は高校だけでなく大学にまで及んでいた。福高は秋吉の方針もあって学力向上に努め、大学入学率第1位となった（文部省発表）。上段は帝大、下段は官公立大に関するデータである。（『自大正十一年至昭和二十年控教務課』）

■受験参考書・帝国大学年鑑

「付録 帝国大学各学部入学試験問題集 昭和三年—昭和八年 九州帝国大学医学部」
（『帝国大学入学提要—昭和八年度新版—』文信社）
『帝国大学年鑑 1934—5』（帝国大学新聞社）

■卒業生名簿

『名簿』の第一号には、大正14年3月10日の第1回生から昭和20年3月22日の第22回生までが、第二号には、昭和22年3月31日の第23回生から昭和25年3月31日の第26回生までが、記載されている。

■京都帝大薬学科第二次学生募集（昭和17年7月）

帝大側も旧制高校生の自校への受験を期待した。上は校長宛に送付された京大医学部薬学科募集の資料である。書き出しに「卒業後の志望は定りましたか」とあるが、文中にも「数学の嫌ひな人にはこの上ない楽天地」との文言や、「卒業生の状況」「一番問題になる兵役関係」への言及もあり、興味深い。（『昭和十七年後期 大学入学関係書類』）

■学年暦（昭和18年度、同19年度）

戦局の悪化により、昭和18年度より修業年限が2年となった。「勤労奉仕」や「行軍」の時間が増えているが、特に19年度には、学校教育が成立し得なくなっていく状況を見ることが出来る。

■村上雄一・林市造・中村邦春氏遺稿集

戦後、同窓生達は戦死した級友の遺稿集を作った。この手紙は昭和20年4月12日、特攻隊員として沖縄で戦死した林市造氏（中学修猷館→福高→京都帝大経済→学徒出陣）の、出撃前日に母親に宛てた手紙である。（『雁来紅 村上・林・中村三氏遺稿集』昭和24年4月 福岡高等学校第十九回文甲同窓会）

■林市造氏関係図書

湯川達典『特攻隊員 林市造 ある遺書』（樞歌書房。1993年8月）、多田茂治『母への遺書 沖縄特攻 林市造』（弦書房。2007年5月）。

■南方留学生に関する国際学友会理事長書状

昭和20年2月17日付書状。同状にもあるように、福高は「留学生教育非常措置」の実施に伴い、昭和20年4月、南方留学生28名を受け入れた。

■南方留日学生時間割（昭和20年4月）

「国語」の授業が多く、文科では「国史」をはじめとする歴史の授業も多い。

■入学志願者受付数一覧表 昭和20年度

昭和20年度の福高志願者の受付数は理科960名に対して、文科109名と極端に少ない。（『昭和二十年度 入学者選抜考査関係書類』）

■福高志願者・入学者数（昭和20年度～同23年度）

戦後措置による陸海軍編入学者や外地引揚転入学者の数が多。上段は志願者（文科、理科、文理の総計）数、下段は入学者（同）数である。（『大正十一年以降 入学許可者氏名 教務課』）

■クラス卒業写真帳（昭和15年）

卒業記念のアルバムを作成するクラスもあった。表紙左上に校章、右下に年紀が皇紀で入れられている。（筒井真氏（第16回文丙 九大法文）寄贈）

■クラス卒業写真帳（昭和17年）

卒業記念アルバム。（古賀英俊氏（第19回文乙 京大法）寄贈）

■絵葉書で見る福岡高等学校

昭和6年(創立10周年記念)頃のものが多い。

■福岡市街及郊外地図

昭和2年5月。福高創設数年後のもの。六本松の市街化もさほど進んでいない。

■福岡市鳥瞰図

昭和11年3月。当時の福岡市は人口30万、九州一の都市となっていた。西部地区は福高をはじめ、女子師範学校、西南学院、中学修猷館等があり、いまに通じる文教地区としての性格を強めつつあった。

■福岡市鳥瞰図部分拡大図(複製)

拡大図の左下に「高等学校」がある。

■九州大学福岡高等学校看板

福高は昭和24年5月、九州大学福岡高等学校となった。この改称は福高生の反発を招き、正門の看板も何度か外された。これは平成17年1月に56年ぶりに九大に戻った看板である。

■福岡高等学校学而寮史

右は昭和24年10月刊行のもの。廃校を目前にした福高在校生が総力を挙げて作り上げた寮史であった。左は創立80周年記念での復刻版。

■最後の卒業証

福高の当時の正式名称は九州大学福岡高等学校であったが、福岡高等学校長名で出されている。(井上喬氏(第26回理1 九大経)寄贈)

■公印

上段が九大第一分校、中段が九大分校、下段が九大教養部関係のものである。

■昭和24年度 新制九大入試問題(一般社会)

昭和23年福高入学者(27回生)は在学1年で修了、新制大学(第1回)を受験した。(『昭和二十四年度以降新制大学入学試験学力検査問題 九州大学第一分校』)

■庶務日誌、庶務事蹟綴

これらの事務資料からも、昭和24年度から第一分校が始まったこと、福岡高等学校と九州大学第一分校との関係がわかる。

■青陵会関係資料

昭和25年10月、福高同窓生は亭々会を発足させ、翌26年1月には第1回青陵会総会を開催した。以後、福高同窓会青陵会は記念祭の挙行、記念誌の発行、寮歌祭への参加等、活発な活動を展開する。

■同窓会会報

福高同窓会は第1回卒業生が出た大正14年3月に発足した。会報は同年から年1回のペースで刊行されたものと思われ、戦後まで続いた。

■六松会寄せ書き、書状(昭和23年3月)

京都福高会(六松会)会員の母校を想う気持ちが伝わってくる。

■『あゝ玄海の浪の華』

昭和44年6月刊。タイトルは「あゝ玄海」の歌詞から採られている。

■『青陵一思い出の記』

昭和47年11月刊。創立50周年記念に際して刊行された。

■『創立八十周年記念 人生旅路遠けれど』

平成14年10月刊。タイトルは寮歌「人生旅路遠けれど」から。

■青陵会『会員名簿』

現在、平成14年10月の第32号まで刊行されている。